



歌人・会社員の複業で、どちらも輝く 共感と驚愕が詰まった “ことばの総合格闘技”短歌の 魅力を伝えたい

機械メーカーに勤務する会社員であり、歌人「なべとびすこ」としても活躍中の鍋島志織さん。創作にとどまることなく、短歌カードゲームの開発やワークショップ開催などを通して、短歌の魅力を伝える活動も続ける注目な若手歌人です。歌人と会社員の複業を実践する醍醐味と苦労、そして短歌の楽しさ、創作のコツも教えてもらいました。

PROFILE

歌人・会社員

なべとびすこ・鍋島志織さん

2013年、文学部人間科学科卒業。印刷会社勤務などを経て、現在機械メーカーでマーケティングを担当。正社員として勤務すると同時に、歌人「なべとびすこ」としても活動。短歌カードゲーム「ミソヒトサジ(定食)」、『57577 ゴーシチゴーシチシチ』の制作や短歌のWebマガジンTANKANESS編集長も務める。



「57577 ゴーシチゴーシチシチ」

原案・ゲームデザイン：なべとびすこ
ゲームデザイン：天野 慶
発売元：株式会社 幻冬舎

長年の苦手意識が 短歌を広げる活動へ

鍋島さんが原案・ゲームデザインを手がけたワードゲーム『57577 ゴーシチゴーシチシチ』（幻冬舎）がSNSでバズり、テレビ番組でも取り上げられるほどの人気ぶりだ。5音カードと7音カードを組み合わせて短歌をつくるゲームで、ふりがな・ローマ字併記のため、子どもや外国人も参加できる。研修などのアイスブレイクにも使えると評判だ。さらに鍋島さんが編集長を務める「短歌のすみっこを伝えるWebマガジンTANKANESS」も、幅広く短歌の情報を掲載し、短歌との出会いの場を提供するなど、注目されている。

創作のみならず周知活動にも力を入れる鍋島さんだが、2014年ごろまでは短歌が苦手だったと言う。「学校の宿題でつくられたことがありましたが、できないし、わからないし、まったくいいイメージがありませんでした」。

転機は通勤時間中の読書だった。歌人の穂村弘さんのエッセーが好きで読んでいたが、「エッセーを読み尽くして、いよいよ短歌関連の本を読むしかなくなったのです。とりあえず入門書から読み始めました」。すると苦手意識が完全な誤解だとわかり、短歌の読み解き方や面白さもわかってきた。しかし、すぐに創作に入らないところが鍋島さんの探求心の深さ。ほかの入門書を読み、得心してから短歌をつくり始めた。「この回り道が今の活動につながっています。私が苦手意識を拭うのに数年かかったので、同じように誤解をしている人がたくさんいるのではと考え、自然に短歌を広げ

る活動にも力を入れるようになりました」。

「歌人で会社員」の 相乗効果を実感中

ことばの総合格闘技。短歌の魅力をそうたとえる。「内容・音・リズム・字面、短い中で伏線も張れるなど、文章創作のさまざまなテクニックを使えます。もちろん全テクニクを使う必要はなく、つくる人も読む人もこだわりたい点を追究できます」。

鍋島さんが短歌をつくり始めるきっかけになった作品がある。「私は日本狼アレルギーかもしれないがもう分からない 田中有芽子」。

日本狼が絶滅したと言われる今は、自分がアレルギーが確かめようがない、という短歌。「誰も言わない、役に立たない表現に共感と驚愕があり、印象に残るのが短歌の面白さです。会社ではスルーされるようなことが短歌では輝きます」。会社員であることも、鍋島さんの短歌の輝きを支えているのだろう。

同時に、歌人であることが会社員生活を支えている。業務で自社サイトの運営やカタログ・社内報の制作を担う中、歌人の活動スキルや学びが役に立っていると言う。「両方やってこそ。両方やっていてよかったと思います」。

とはいえ複業は簡単ではない。『57577 ゴーシチゴーシチシチ』の発売前は時間との戦いだった。共作者で歌人の天野慶さんや出版社とは通勤中や昼休みに連絡をとり、仕事帰りにオンラインミーティングをして、有給休暇も活用しながら完成にこぎつけた。「昼間に動ける天野さんと出版社の編集さんにサポートしていただいたので

助かりました。でも、やっぱり大変でした」。

甲南だから養えた 複業できるエネルギー

複数のことを同時進行できる能力は、大学在学中に培ったと言う。「人間科学科なら、興味のある心理学だけでなく好きな文学や哲学も学べると考えて進学したのですが、本当に幅広い分野を学べました。2つのゼミに所属し卒業前の課題として、社会学の観点から若者論を書いた卒業論文と卒業制作としての小説の2つを作成しました」。そして大学で出会った友人の存在が、短歌を広める活動を支えている。「『短歌は面白い』と言うと、友人たちはきちんと話を聞いてくれるのです。聞いてもらえる土壌があったので、いろいろな人にも伝わるのじゃないか、という自信がありました」。

そんな友人たちから、30歳の誕生日に最高のプレゼントをもらった。「軽音楽部の先輩が短歌をつくったことのない先輩や友人に声をかけてくれ、39人が私のために短歌集をつくってくれました。こんなうれしいこと、ないですよね」。

創作活動を活発化し 歌集が売れる世の中へ

今後複業を続けると意欲的だ。「ゲームやWebマガジンを通して、多くの人に短歌に触れてもらうことと、これからは創作活動に力を入れたいと思っています」。短歌を広めるだけ「の人にならないように」。鍋島さんが描く未来は、歌集が売れる世の中になること。「小説家は専業ができるのに、歌人は才能があっても専業ができず

鍋島さんが責任編集を務める
短歌のすみっこを伝える
Webマガジン

「TANKANESS」



<https://tankaness.com/>

にそれが磨かれたいのはもったいない。ブームになったときに『あんな人がいたな』と思い出してもらえればいいです」。

『咲く前もさくらだったよ背景になって暮らせる才能もある』お気に入りの自作の一つだ。

最後に、短歌を始めるためのアドバイスももらった。「31文字の制約があるので、止めどきがわからない詩や小説より、つつきやすいと思います。季語が不要で、字余りでもいいです」。なるほどハードルは低そうだが、具体的にどうするか。「私もそうですが、スマートフォンを使うと手軽です。たとえば、最初はツイッターに書き込むイメージで140文字ほど書いて、自分の言いたいことばにアンダーラインを入れます。57や77など、短歌に使えるリズムを見つけて構成していきます。最初から31文字でつくりうと思わず、削って31文字前後にするほうが簡単です。そこからどれだけブラッシュアップできるかが腕のmiseどころです」。今後さらに腕を磨いていく鍋島さんの創作活動に期待したい。